# 憑かれた家

「勘ぐられると困るから先にいっちゃうけど、確かにちょっとしたアクシデントのあった家なんですよ」赤と黒の格子縞のネクタイをしめた営業マンはいった。

「一年半ほど前にね。この家の前の持ち主の奥さんが、階段から落ちて首を折って死んでるんですよ。だからこの家は売りに出されて、それを今の持ち主が買ったんです」

可南子と裕介はうなずいた。今や二人とも立て板にされてしまい、赤ら顔の営業マンは名調子で水をかけている。銀色のボールペンで木目の相談カウンターをポンとたたくと、さらに続けた。「だけどね、そんなことを気にしてたら、中古住宅を買うどころかアパートにだって住めませんや。現にわたしの住んでるマンションだって、半年前にうちのばあさんが死んでますからね。卒中でしたけど。だからって、もしうちのマンションを売りに出したら気味悪がって買わないかというと、そんなことはないでしょ。高いとか狭いとか、ほかには立派な理由があるけどね。死人や病人のでた部屋なんてごめんですっていってたら、ホテルにだって泊まれませんや。

それにね、今の持ち主がここを急いで売ろうとしてるのは、もっと全然現実的な理由のせいなんです。こりゃ、堀り出しもんですよ」

若夫婦はすっかり気をのまれてしまって、来週の日曜日にその家を見にいくことを約束した。

ピクチャー・ウインドウで囲まれた「ハウジング情報センター」を一歩出ると、二人が通り抜けてきた自動ドアも閉じないうちに、可南子はぷっと吹き出した。「なんだか講釈師みたいな人だったわね」

「商売だからね」と彼女の夫も笑った。夫婦は肩を並べて、休日のにぎやかな通りを駅の方へ歩きはじめた。二人とも長身で、まだ若く、可南子は目元の明るい美人だった。

「だけど、どう思う？」可南子はきいた。

「堀りだしものだと思うよ。まあ、話をきいた限りではだけどね」

「売値が安いことは確かね。それに足立町なら、ほとんど都心に住んでるようなものだもん、その点は文句ないわ」

「お義父さんとお義母さんは、やっぱり新築の建て売りを買えっていってるかい？」

若夫婦は、可南子の方の両親と同居するために、今の二Kのアパートにかわる広い家を探しているのだった。

「うん。田舎の家を売る段取りはもうついてるんですって。だからお金の心配はしなくていいから、テレビドラマに出てくるようなきれいな家を買えっていうのよね」可南子はあきれたように笑ってみせた。同居の話が出たのは、三ケ月ほど前、可南子の父が肝硬変で入院してからだった。幸い大事には至らなかったが、このできごと



は可南子の心臓にパンチをくらわせるのに充分だった。自分の親だって歳もとれば病気にもなる、いつかは死ぬことだってあるのだという認識が頭にこびりついて、にわかに、そしてむしょうに両親と暮らしたくなってしまった。

裕介に話すと、穏やかな口調で賛成してくれた。「その方がいいと思うよ。東京にならいい医者がたくさんいるし、おれだって少しはコネがあるからね」裕介は、かなり大きな私立病院の事務局に勤めているのだ。

そこで家探しを始めたのだが、なかなかうまくはいかなかった。可南子の求める条件は三つ。(1)一戸建であること、(2)適当な広さ、(3)東京二十三区内であること —— 従って、必然的に新築であるはずがない。

実際のところ、中古だってそんな条件はむずかしいだろうと裕介はいった。「おれの同僚なんか、片道一時間半かけて通勤してくるのがゴロゴロいるよ。だから、そのへんのことは気にしなくていい、何とかなるから」

でもあたしはそんなのはイヤよ、と可南子は思っていたのだ。裕介が星を仰いで出勤し、毎日終電で帰ってくるのでは、ピカピカの家に住んでいても何にもならない。

けれども、確かに可南子の理想は高すぎた。中古の家はなかなか見つからなかった。父はとっくに退院し、どんどん回復してきているのに —— 可南子はイライラしていた。

そこへ、ハウジング相談センターのコンピューターが奇跡をもたらしてくれたのだ。コンピューターとは偉いものだ。あの町のあの不動産屋がちょこっとインプットしたものを、この町のこの相談カウンターのブラウン管へさっと引き出して見せてくれる。端末機のキーをポコポコたたく営業マンの指を見ながら、可南子はひたすら感心し、もっと早くここに来てみるんだったと思った。以前に事故があった事くらい、この条件に比べたら何ほどのものでもない。営業マンの言う通りだ。

ただ、死に方としては怖しいなと可南子は思った。階段から落ちて首の骨を折る。不幸な事故。死の一瞬に、その不運な人は自分の頸骨が砕ける音をきいただろうか？足を踏みはずしてから何秒ぐらいかかっただろう。悲鳴をしぼり出したのどがつぶれ、その奥に銅臭い血の味がしたかもしれない……

そんなことを考えていたので、背後から声をかけられたとき、必要以上にびっくりしてしまった。可南子がはじかれたように、裕介が不審そうに振り向いてみると、そこには六〇年配の小柄な男がひとり、ハンカチで汗をぬぐいながら立っていた。

確かに暑い日だった。しかも三人は駅前の人いきれの中に立っていた。男のハンカチは清潔で、身なりもこざっぱりとしている。それでいて、可南子はこの男にひどく異様なものを感じた。それがなぜなのか気がつくのには大してかからなかった。この男は長そでのワイシャツを着て、おまけに左手には手袋までしている。今は七月だというのに。

「お呼びとめしてすみません」と男はいった。

「ただ、どうしてもお話ししたいことがあるんです」

裕介は慎重な顔つきになった。また新手の宗教団体かなと思ったのだ。

「何でしょうか」

「おふたりは、今あの不動産センターにいらしてたでしょう？そして、足立町の中古の二階家を勧められていたでしょう？」
「そうです。でも、どうしてそんなことを知ってるんですか？」
「私は気をつけて見てたんです。あのディスプレイ用のブラウン管は外からも見えますからね」男の口調はひどく熱心だった。いや、熱心というより――可南子は頭の中を検索して、使いつけない言葉を探した――そう、切迫している。
「その足立町の家のことで、どうしてもあなた方にお話したいことがあるんです」と男はいった。そして、可南子と裕介がチラリと視線を交し、目に見えて〝不審〟を飛びかわせると、あわててズボンの尻ポケットに手をつっこんで、名刺と、少しくたびれた一枚の紙切れをとり出した。
「失礼しました。私は恩田という者です。中野の方で学習塾の教師をしています」
名刺には、確かにその通りのことが刷られていた。続いて紙切れの方をみると、折り目のすり切れかかったその紙は登記簿の謄本だった。発行印は、去年の四月の日付になっている。
「私は、去年の三月まであの家の持ち主でした。私があの家を売りに出したんです。買い手はすぐにつきました。それがその、いちばん最近の名義人の本町信太郎という人です。ところが本町さんは、私との約束を破って、またあの家を売りに出してしまったんです」
本町氏が約束破りかどうかはともかく、謄本には、確かにそういう所有権の移転があったことが記録されている。
裕介と可南子は、今日何度目になるかわからないが、顔を見合わせた。
一〇分後に、夫婦は恩田という男と駅前の談話室にいた。裕介の勤める病院はこのすぐ近くで、行きつけの店だ。見知らぬ他人と話すのに、知らない店には行きたくなかったのだ。
うけ答えはすっかり夫にまかせて、可南子はずっと恩田を観察していた。悪い人相ではない。品のいい感じだし、夫婦がともかくお話を伺いましょうといったとき、くどいくらい礼をいって頭を下げたのも、常識的な態度だった。ただひとつ、気になるのはあの長そでと手袋だ。しかも、今もその左手はテーブルの下に隠されている。
「さっきも申しあげたとおり、足立町のあの家は私の家でした」と恩田は口を切った。
「もともと、私の親父の代からあそこに住んでましてね。空襲でやられて、しばらくはバラックみたいな家だったんですが、それを親父が手を入れてきれいにして、親父が死んでしばらくして私が建て直しました。十五年ほど前のことです。それからずっと、家内と二人で暮らしてきました。子供に恵まれなかったんですが、私は高校の、家内は小学校の教師をしてましたんで、淋しくはありませんでした」恩田は四角く折ったハンカチで半分はげあがった額をぬぐい、うっすらと汗をかいたコップをとって水を飲んだ。
「そんなんで、二人とも停年になったとき、その退職金で下宿屋をはじめようと思ったんですよ。あの辺は大学や専門学校も多いですからね。家内も大賛成でした。で、二階を建て増したんです」
「あら」可南子は思わずいった。「あの家は、もともとは平屋だったんですか？不動産屋さんはそんなことといわなかったわ」



「言いっこないですよ、奥さん」と恩田はいった。妙にこわばった口調だった。「あの連中が、商品の価値を下げるようなことを言うもんですか」
「いや、そうでもないですよ。あの家でアクシデントがあったことはちゃんと話してくれました」と裕介がいった。彼は目つきの穏やかな男だったが、それをさらに優しくして恩田の顔を見た。「あなたがその、階段から落ちて亡くなった方の御主人なんですね」
「そうです」と恩田は答えた。「家内が死んだぁと、私は命からがらあの家を逃げ出しました。もうあの家には、自分はもちろん誰も住まわせるつもりはありませんでした。そこへ、本町さんから申し出があったんです。建物はいらない、壊してアパートを建てたいからとね。だから喜んで売ったんです。私には建て直すだけの資力がもうありませんでしたからね。それなのに今さら約束を破って――」
そこへウエイトレスがアイスコーヒーをもってきたので、話が途切れた。カッカしはじめたいた恩田には、ちょうどいいタイミングの間だった。可南子もグラスに手を伸ばし、ミルクを入れ、ストローを袋から出してカラカラと涼しく鳴る氷の中へ入れた。そして、それとそっくり同じ動作を、恩田が右手だけでやるのを見ていた。左手はテーブルの下で膝の上にのせられたままじっとしている。恩田はコーヒーをすすり、またハンカチを使い、落ちつきをとり戻したようだった。けれども、その落ちついた口調でとんでもないことを言いだした。
「あれは怖しい家です」目が真剣だった。「私の家内は事故死ではなく殺されたんです。あの家に憑いているものに殺されたんです」
夫婦はぎょっとしてグラスから顔をあげた。裕介が何かいうより早く、可南子の方が早口に思わず笑いながら「そんな、不動産屋さんは事故だっていってましたよ」
「そうでしょう。連中は信じとらんのです。私がどんなに一生懸命説明しても耳をかそうとしません。本町さんだけはわかってくれると思ったが、やっぱりだめでした。そんなことをすればこれから何人殺されるかわからないと私があんなに言ってきかせたのに、あの家を壊さずに売りに出したりして　」
（ああ、たいへんだ）と可南子は思った。（私たちたいへんな人にかかわっちゃった。この人、どっかおかしいのかもしれない）
裕介の方をチラリと見ると、彼は新興宗教の勧誘を相手にするときよりも、何倍も慎重な顔になっている。可南子は恩田の目をそっとのぞいてみたが、それはまっすぐで、澄んでいた。けれども、可南子は今まで狂人の顔というのを見たことがなかったので、それが果して正気のしるしであるかどうかわからなかった。いやむしろ、狂気の人というのはえてして涼しい目をしているのではないか？
その目が緩み、口元に薄笑いが浮かんだので、可南子はぞっとして身をひいた。けれども恩田が話し出すと、その声は決して精神のタガがはずれた人の声ではなかった。可南子はふいに、もう何年も前に縁がなくなってしまった世界を思い出した。学校だわ。この声は教壇から聞こえてくる声に似ている。
「気持はわかりますよ、奥さん」と恩田はいった。「奥さんは私の頭がおかしいと思ってらっしゃるでしょう。無理ないです。いきなりこんなことを言われたら誰だってそう思います。まして、あなた方お若い方は、迷信を気になさらんでしょうから」

「迷信？」
「そうです、迷信です。きいたことがないですか？平屋に二階をつぎ足すという建て増しの仕方は、『お神楽』といって非常に不吉だとされているんです」
裕介はかぶりを振って可南子を見た。可南子も首を振り返した。
「ないですね。知りませんでした」と裕介が答えた。
「そうですか。近頃はそうなんですね」恩田はため息をついた。
「でも、私にしたって似たようなもんです。迷信を知ってはいましたが、現実問題を先に考えてしまったんですよ。丸々建て直そうと思えばできないこともなかったんですが、それをやると、中国旅行をあきらめなければならなかったんです」
「奥さまと、ですか？」可南子がきいた。
「そうです。家内は満州で育ちましてね。ぜひもう一度訪ねたいと楽しみにしていました。それに、やってきた建築屋も、下はまだ壊しちゃもったいないと勧めてくれたんです」恩田はうなだれた。
「結局、それが家内を殺したことになりました」
ひと呼吸、沈黙が落ちた。
「どういうことなのか、筋道たてて話して下さいますか」ややあって可南子がいった。裕介の顔には（やれやれ……）の色があったが、可南子はかまわなかった。
そこで、恩田は話しはじめた。

気がついたのは、建て増しして一週間くらいあとのことでした、と恩田はいった。三月のはじめでね。まだ風は冷たいけれど、日差しはぐっと明るくなってポカポカしてました。

それなのに、家の中だけがやけに冷えこむのだ。
最初のうちは、単に風通しがよくなったのだろうと思っていた。今までは無かった階段やベランダがついたし、部屋が増えた分だけ窓も増えたからだ。
ただ、停年の時期が一カ月ほどずれていたので、そのころはまだ、一日中家にいるのは妻のまつ子だけだった。だから外から帰ってくる恩田ほど、まつ子は家の中の寒さを感じてはいないようだった。
むしろ、まつ子が訴えるのは家の中の臭いの方だった。これは建て増してすぐ感じるようになったが、本当に鼻につくほどひどくなったのはやはり一週間ほどたってからだ。何とも表現しようのない、生ゴミの腐ったような臭い。
ネズミでも死んでるんじゃないかしら、とまつ子はいった。工事にかかる前に消毒会社に来てもらったからだ。まつ子は几帳面な性質だったので、毎日少しずつ、まず一階から、物入れや押し入れや家具の陰などを調べてみていた。ただ、その格好ときたら奇天烈だった。古い運動着に昔の全学連のようなマスクをして、恩田が庭いじりするときにはめるボロボロの軍手をつけている。すき間に手をつっこんだとき、ちょうどネズミの腐りかけた死体にあたらないとも限らないですからねと、まつ子は真面目な顔でいった。
恩田が初めてあれを目にしたのは、まつ子が一階の大捜査を終えた日の晩のことだった。
工事の終了からちょうど九日目、臭いの方は日によって強い弱いがあるが、冷えこみはあいかわらずだった。もう桜の季節だというのに、時々――恩田とまつ子の老眼のせいでなければ――家の中で



は吐く息が白く見えた。
時刻は夜の九時ごろだったと思う、恩田はいった。まつ子は風呂に入っていた。恩田は先にひと風呂あびて、冷蔵庫から缶ビールを出し、リップをひっぱって開けて、階段のいちばん下の段に座っていた。ちょっと腰かけるのには手ごろな高さだし、新しい階段は木の香りがして、それも好きだったのだ。
ビールを半分ほど飲んだところで、階段の上から風が吹きおろしてくるのに気がついた。
（まつ子が窓を開けといたのかな）
階段をあがりきったところはすぐ短かい廊下になっていて、右手に小さな窓、左手には下宿する学生を待つ三つのドア、廊下のつきあたりにはクロゼット風の物入れがつくってある。これはまつ子の発案だった。（学生さんと下宿させるなら、スキーやサーフボードのしまい場所がなくちゃあね）
吹きおろしてくる風は冷たかった。いやに冷たい。しかも――臭い。まぎれもなく、まつ子がやっきになって原因をつきとめ、消そうとしているあの臭いだ。もう新学期からの入居者が来まっているので、まつ子はひどくあせっていた。
恩田は首をよじって階上を見あげた。
電灯を消してあったので、あたりは暗かった。台所の電灯のパイロットランプと、窓からさしこむ外の街灯の光だけが薄青白い。
その薄闇の中で、階段の最上段に腰かけている白い脚が見えた。すねが細い。子供の膝だ。しかも裸足だった。上半身は闇にまぎれて見えない。
それでも一瞬、恩田はまつ子かと思った。まつ子は子供がいないせいか、長年小学生を教えているせいか、いい歳をして童女のようなところがある。押し入れの陰からわっとおどかして喜ぶようなところがある。
そのとき、風呂の方でザアッと湯を流す音がした。
そうだ、まつ子は風呂に入ってるんだ。恩田は思い出した。
じゃあ、あれはいったい誰なんだ？
恐怖というのは消去法なのだ。いきなり怖くなるのではない。合理的な理由で消しきれないものが残ったときはじめて怖くなるのだ。そして恩田夫婦の場合、合理的に消去できる要素は実に少なかった。
恩田はサッと立ちあがって電気をつけた。缶の中のビールが波だってピチャッと親指にひっかかった。腰を浮かしてからスイッチに指が触れるまでのまばたきするほどの短い時間に、階段の上のその暗闇の中を、何かがじわりとにじむように近づいてくるのを感じた。その感じは極めて強く、思わず目をつぶったほどだった。
明りがまたたいた。異臭がブン、と強くなり、何かが動いて空気が乱される気配がした。
階段の上には誰もいなかった。
一呼吸おいて、バタンと戸の閉まる音がした。それが二階のつき当たりの物入れの戸を閉める音だということは、あとで気がついた。

「今思えば、あのときすぐに手をうっておくべきでした」と恩田はいった。アイスコーヒーは氷がとけて、水っぽいまずそうな色になっていた。
「手をうつって？」裕介がきいた。

恩田はぽつりと答えた。「あの家を焼いてしまうべきだったんです」

二度目にそれを見たのは、真昼間だった。階段のことがあってから三日目のことで、恩田は春先に流行する鼻風邪にかかり、授業が終わってすぐ帰宅するところだった。

階段で妙なものを見たこと、もしくは見たと思ったことは、まつ子には話してなかった。実際問題として話しようがなかったのだ。最近恩田の老眼が急に進んで、眼鏡をつくりなおそうかという話をしたばかりだったから、なおさらだった。同い歳だと普通は男の方が若く見えるのに、まつ子は、いつも恩田を年寄り扱いしている。

角を曲がって、家の側面がまっすぐに見通せる道に入ると、恩田はそれにすぐ気がついた。この方向から見える窓は三つ。一階のトイレと洗面所の窓と、二階のあの階段の上の窓。

その階段の上の窓のガラスに、何かがへばりついてこちらを見ていた。

ちょっと見ると、パパの帰りを待つ小学生のようだ。けれども少し観察していれば、その〝何か〟は背たけこそ小学生並みだが、頭が異様に大きく、その割に顔がはっきりしていないことに気がつくだろう。べったりとガラスにくっついた手のひらは、陽にあたったことのないもののように青白く、人間のものというよりは爬虫類のもの——外壁や軒下に吸いついているヤモリのものだ。飛び出しそうな目で見つめている恩田には、その指が少なくとも六本以上あることがわかった。

恩田は立ちすくんだ。家まではあと一〇メートルほどだ。まずまわりを見まわした。誰かこのひどい冗談を何とかしてくれというように。あれはおれの家だ。何だっておれの家にあんなものがいる？

暖かな午后、静かな住宅地がつづくこの辺りには、人の往来はほとんどない。新聞の集金の自転車が一台、角の塀に危なっかしく立てかけてある。あとは遠くから聞こえてくる干した布団をたたく音

（バン、バン、バン）

恩田はつっ立っていた。額から汗をにじませ、目を見はって、叫びながら逃げ出したい衝動と闘いながら

（バン、バン、バン）

立ちすくむ恩田の頭の中に怖しい声が響いてきた。

家にはまつ子が一人でいる。

あの得体の知れない者と一緒に。いや、本当にそうだろうか？まつ子は無事だろうか？今ごろはとっくに——

まつ子！と声に出さずに叫んで恩田は駆け出した。運動会の職員のレースでも走ったことのないほど走った。よろけ、途中で靴が脱げかかり、文字通り転がりこむように玄関にたどりついたとき引き戸を開けて出てきたまつ子にぶつかった。まつ子は仰天した。片手に買物袋を下げ、もう片手に財布を握ったまま、確かにまつ子が無事なことを確かめようとする恩田にめちゃくちゃにゆすられ、それから階段の方へすっとんで行く夫を茫然と見送り、ようやく我に帰って夫に追いつくと、誰もいるはずのない空っぽの階段と二階を見上げているその青ざめた顔を見て、心配そうにたずねた。「あなた。また血圧じゃないんですか？」

まつ子は全く信じてくれなかった。



彼女の反応は最悪のパターンだった。まず笑い、次に少し怒り（気持の悪い話をしないで下さいよ。いやあねえ）、最後には恩田の身体のことを心配する。しきりと「停年退職症候群」という誰がつけたのかも怪しいような病名を口にした。

恩田にとって信じられなかったのは、まつ子があれを一度も見ていないということだった。一日中家にいても、何度となく用事があって二階へあがっていっても、まつ子を悩ましているのはただあの鼻の曲がりそうな異臭だけだった。

そんなばかな、と思って、恩田はあることを思いだした。五年前に、高校一年生を担任していたときのことだ。夏休みの移動教室で軽井沢へ行った。学校の寮は駅からずっと離れているので、辺りは林ばかりだ．それでも二百メートルほど下ったところに、小さな古い神社があった。

誰もが言い出したのでもなく、肝だめしをしようということになった。

星のきれいな満月の夜だった。恩田は寮の玄関先のベンチに座って、生徒たちの楽しそうな騒ぎをきいていた。まずくじ引きをしてカップルを決める。落旦や歓声。子供たちにとっては肝だめしは楽しいことなのだ。遠い昔、墓地の入口に自分の名前を書いてくると決めをして夜道を歩いたときの自分を思い出しながら、恩田は今の子はドライだなあと思っていた。

ところが、一人だけ、どうしても参加しないという女生徒がいた。誰が誘っても頑として動かない。小柄だがはしっこくて、日頃は活発で知られている女の子だったから、周囲はとまどっていた。しまいには怒って、「全員参加だよ。先生からも言ってやってよ」と言いつけにくる生徒もいた。それでもその女生徒は動かなかった。

今、建て増してきれいになった我が家で、自分の健康を気づかっているまつ子を前にして、恩田の耳にはそのときの女生徒の言葉がはっきりとよみがえっていた。（あたしは行かない。行けないのよ。あそこには行けない。みんなには見えないだろうけどあたしには見える。あたしにはわかるの）

見えないことの幸せ。

恩田はそれ以上、まつ子に話すことをやめた。ただ、もう押入れや物隠を捜してみることはやめるようにとだけ、少しくどいくらいに繰り返した。

その夜、恩田はほとんど眠れなかった。寝床の上で転々としながら、なぜこんなことになったのかと考えていた。

あれはどこからやってきたんだろう？

建て増しするまではこんなことは絶対になかった。そうするとやはり建て増しのせいなのか？不吉だといわれている「お神楽」に建てたからなのだろうか。

恩田の頭の中の、常に合理的な答を人に与えようとする教師の部分が反論した。現代の建築は建てるんじゃない、製造もしくは創造されるのだ。この家の二階だって、木でも鉄でもない超軽量なんとかでできている。釘のかわりに接着剤を使い、外壁を塗るのだって水性塗料を使った。恩田が（何か頼りない感じだな）と言うと、作業着の胸ポケットにネーム入りのボールペンをつっこんだ若い建築家は、笑ってこう言ったのだ。（大丈夫、技術はどんどん進歩してるんですよ。今はね、石油タンカーの船体だって水性塗料で塗る時代なんです……）

恩田は布団の上に起きあがった。頭が重く、身体がだるい。ビールでも一本あけてみよう、そうすれば少しはましかもしれない。

枕元のスタンドをつけると、障子のさんに指をひっかけて開けた。そしてその場に釘付けになった。

障子の向こうは廊下だ。その端が階段、ぐるりとまわっている下から四段目まではその位置からも見ることができる。その四段目に、あの白い膝がのぞいていた。

降りてきた、と恩田は思った。本当にその言葉しか浮かんでこなかった。降りてきた。そう思うと身体が動かなかった。足がすくんでしまった。そのとき外を通りぬけた車がなかったら、ヘッドライトが玄関の引き戸をぬけてサッと一筋さしこまなかったら、そのままそこで朝までにらめっこをしていたかもしれなかった。

一条の光が恩田を動かせた。考えるより先に動いていた。のどをひゅうひゅう鳴らしながらこうもりのように手をひろげて階段の電灯のスイッチに飛びついた。明りがついたとき、木目の階段の上を何か黒い影が疾風のように二階へのぼってゆくのを見た。またあの臭いがプンとして、戸がばたん！としまった。

恩田は息を切らして階段の下に立っていた。布団の中でまつ子がもぞもぞと寝返りをうち、なにかつぶやいて、静かになった。そしてそれが恩田に勇気を与えた。

彼は一歩一歩階段をあがっていった。

階上につくと、まず廊下の電気をつけた。それから三つのドアをひとつずつ開けては灯りをつけ、ドアを開け放った。雨戸を閉めてあったが　明るい光が二階いっぱいにあふれた。恩田は元気づいた。光はどんな種類のものであれ味方に感じた。

恩田は足音をたてて廊下を進み、物入れの戸に近づいた。平凡な合板で、はじご状のデコボコが表面につけてある。まつ子の掃除がゆきとどいているので、そこにもほこりひとつない。

恩田がそのコの字型のとってに手をのばしたとき、それはふいにきしみ、恩田の手が触れないうちに自分からパッと開いた。広くはない。だが、その内側の闇の暗さをうかがわせるには充分すぎるほどだ。

恩田はぎょっとして手をひっこめた。奥から、冷たく、そして例の吐き気をもよおすような臭いをいっぱいにはらんだ風が吹き出してきた。だが、こうしてま近に感じると、それは風ではなかった。風というよりむしろ――（息のようだ）

恩田は鼻に手をやって後ろへ下がった。膝がガクガクしていた。自分が年寄りであることを思いだした。逃げ足が遅いことを思い出した。昼間見たものを思い出した。エレベーターで急降下したように体温が急激に下がり、光は色を失ない、この戸を開けても電灯の光は決してこの内側を照らせない、逆に、戸を開ければ内側に閉じこめられている闇がいっせいに二階いっぱいにあふれ出てくるだけだと確信した。

まさにその瞬間、物入れの闇の奥であれが笑ったのだ。低く押し殺した、だが勝ち誇った笑い声。生徒達には「笑い」ではなく「嗤い」と書くのだと教えるような下非た声。獲物を待ち伏せしてほくそえむ声。

恩田は背を向けて逃げ出した。まわれ右をした瞬間に物入れの戸がいっぱいに開くのを背中で感じた。毛穴という毛穴が鳥はだだち、まるで全身で悲鳴をあげているようだった。廊下をまっしぐらに進



み、階段を飛び降りるようにして降りた。いや本当に飛び降りたのかもしれなかった。何かが背後に急速に迫ってきていた。うなじに息が（冷たい）かかるほど近くに。

激しい音をたてて障子をたてきると、布団をひっかぶった。驚いて目を覚ましたまつ子には「何でもない。寝ろ、寝ろ」とだけいった。だが声はかすれ、歯がガクガクしていたので、自分でもそれがちゃんと言葉になってないことはわかっていた。

翌朝までは何事もなかったが、起きてみると二階の電気が消えていた。ちゃんとスイッチがオフになっていたのだ。

「もちろん私は消してませんし、まつ子もしてませんでした。あれがやったんです」恩田は静かにいった。だが、クーラーがきいているのに額には汗が浮かんでいた。急に目のあたりのしわが目立ち、口元がゆるんだ。可南子は、この人はこの話を思い出すたびにひとつずつ歳をとってゆくのじゃないかしらと思った。

「翌日、私は家内にくどいくらい外出の約束をさせて学校へ出ました」恩田は続けた。「夕食も外でおち会うことにしました。家内は不思議がりましたが、約束はしてくれました。私は学校を休めなかったんです。その日は生徒たちが私のお別れ会を開いてくれることになってたんです」恩田の顔に苦い笑いが浮かんだ。「お別れ会は盛会でしたよ。そのあと私は待ち合わせ場所へまっしぐらに行きました。そこで三〇分待ちました。それでもうたくさんでした。私は家へ急ぎました。手おくれでした。家内は死んでいました」

発見したのは夕刊の配達にきた少年だった。玄関が開けっ放しになって、廊下の端に倒れているまつ子が見えたのだ。

警察が検死に来て、死亡時刻は午前一〇時ごろのようだと教えてくれた。事故ですね、お気の毒です。だが、恩田はこれが事故なんかではないと知っていた。まつ子がいつ殺されたのかも知っていた。まつ子はきちんと和服を着て、玄関にはいちばんいい草履がそろえてあった。外出の仕度をして、もう出るところだったのだ。それをどんなことをして、あれは階段のところまで呼び戻したんだろうか？まつ子をつき落したあと、階段の上に座って、誰が最初に発見するかをながめていたのだろうか？まつ子が訪ねるはずだった友人が、どうしたのだろうとかけてきた電話のベルをきいて嗤っていただろうか？不運な少年が死体を発見したあと、恩田と連絡がとれずに右往左往している近所の人たちや、約束の場所で冷や汗をかいてジリジリ過ぎる時間を耐えていた恩田を面白がっていただろうか？

恩田の胸に怒りが燃えあがった。仮通夜の仕度や忌やみを述べるために家の中には大勢の人間が集まっていた。それも恩田を力づけた。

彼はもう一度、二階へあがっていった。

下宿になるはずだった二階は、一時的な物置きになっていた。どかされた家具や衣類がまとめて置いてある。恩田は身体の脇に両腕をたらし、こぶしを握りしめて物入れの戸へ近づいた。階下の人が出入りする足音や話し声が、足の裏を通じて伝わってくる。

戸は、今度は自分から開こうとはしなかった。恩田はとってを左手でつかむと、手前に引いた。ギッという音がした。

ぽっかりとうつろな内部があらわれた。何も入ってない押入れの、人をばかにしたような空間。ここには木の香りはしなかった。わず

かに接着剤臭いが、それもかすかだ。それに問題のあの臭いがしない。恩田はもう少し広く戸を開けた。

ギシッ。

その瞬間、奥の方から何かが矢のような速さで飛び出してきて、恩田の左手首をつかんだ。叫び声をあげてふりほどこうとすると、それはからむように巻きついてきた。六本の指、青白い腕。胸のむかつくようなあの臭いが、これまでにない強さで鼻孔を襲い、恩田は自分が物入れの奥にひっぱりこまれようとしているのを感じた。力は怖しく強かった。足をとられ、柱につかまった右手が宙を泳いだ。物入れのうしろの壁がぐっと迫ってきた。それは壁というより、それ自体が無限に続く暗黒の廊下の入口のように見えた。視界がとざされた。嗤い声があがった。

どたどたと階段をあがってくる足音がしたのはその時だった。叫び声がとどいたのだ。かけつけた人たちが見つけたのは、ぴったりと閉じている物入れの戸と、その前にうずくまるように倒れている恩田の姿だった。

「それから喪式が終わるまで、私は階段に近づきませんでした」と恩田はいった。「そして喪式が終わると、身のまわりのものと家内の骨だけを抱いてすぐに逃げ出したんです。間もなく学校を通じて不動産屋から連絡があって、あの家を空っぽにしておくくらいなら売らないかと持ちかけてきました。私は断わりました。だって、そんな無責任なことができますか？あの家は人間の住む家ではないんですよ」

裕介は黙ってかぶりを振った。やれやれ、を通りこして、苦い顔をしていた。それを見た恩田は、可南子の方が有利な聞き手だと判断したのか、彼女の方へ向きなおった。「信じて下さい。奥さん！本町さんにあの家を売ったのは家は壊してしまうと約束してくれたからです。それなのに、今さらあの人は約束を破ってあのまま売りに出してしまった。

私はそれを放ってはおけません。死ぬのはまつ子だけでたくさんだ。あの家を見に行く約束は、もうしてしまったんですか？」

「ええ、はい――」可南子はしどろもどろになった。恩田はだんだん大声になり、周囲のテーブルの人たちがこちらを見て笑ったり、眉をひそめたりしている。可南子は頬がほてった。そのくせ身体じゅうが寒くなった。「今度の日曜日に……」

「おやめなさい！」恩田はすがるように身をのり出してきた。「絶則におやめなさい。行っちゃいけない。よろしいですか。私は調べたんです。二階のつぎ足しがなぜ不吉なのか。単に家相が悪いからとか、一家の主人が忌うことになるとか、様々な言い伝えがありました。けれども私にとっていちばん重要だったのはこういう説でした。古い建物に新しい建物を重ねると、そこに魔がさす――つまり、魔物の通りぬける道をつくってやることになるというんです」

可南子は思わず手で口をおおった。その手首を裕介がぐいっとつかんだ。「可南子、帰ろう」彼はぶっきらぼうに言った。「もうたくさんだ」

「待って下さい」恩田はばね仕掛けみたいに立ち上がった。「今までの人たちも、最初はみんな信じてくれませんでした。でも証拠があれば別でしたよ」恩田は右手でシャツの左腕をめくりあげると、手袋をひっぱってとり、非常な早口で「あれにつかまったあとです。



私の左手です。もう使いものになりません。医者にもなおせないんです」

恩田は腕を夫婦の目の前につき出し、外側にねじ曲げて見せた。肱から先が不気味に白っぽくふくれあがり、そこに点々と、内出血のように青黒いあざがついていた。――そしてそれは――六つ、あっ、た！

可南子は悲鳴をあげかけた。だが、あたりに響いたのは別の声だった。彼女ば口を開けたのと同時に、入口の方で誰かが怒鳴ったのだ。「またやってやがる、あのじじい！」

雷のような怒声が轟き、それと同時にその声の主がすっとんできて恩田の襟首をひっつかんだ。あの赤黒ネクタイの営兼マンだった。そのうしろには、彼ほど怒り狂ってはいないが顔をひきつらせている若い営業マンがいた。カウンターのところにいた顔だわと可南子は思った。

「まだこりないのか、このじじい！何度邪魔をしたら気がすむんだ」赤黒ネクタイは怒鳴った。恩田はゆさゆさゆすぶられて相手とは対象的な蒼白な顔になった。「私は何も間違ったことはしていない。全部本当のことなんだ」と言い返したとたんに、恩田の小柄な身体がふっとんだ。それだけでは足らずに営業マンはさらにこぶしで殴りかかった。店内の人間がわっと騒ぎたてた。店長らしい人間と若いウエイターが走ってきた。営業マンを後ろからおさえようとした裕介と若い方の男がはねとばされた。営業マンはさながら闘牛のようにしゃにむに恩田につっかかっていった。テーブルが倒れ、グラスが割れて飛び散り、まもなくサイレンが聞え、警官が店に走りこんできて二人がかりでとりおさえてもなお、恩田にむかって罵声をあびていた。営業マンと恩田がひったてられていってしまうと熱狂際なアンコールのあとの観客のように、店内の人間もバラバラと座りはじめた。可南子と裕介は茫然としていた。とり残された若い営業マンが、ポツリと言った。「僕ら、ここにコーヒーを飲みに来たんですよ」

それから一週間後の日曜日、あいにくの雨だったが、可南子と裕介は約束どおり足立町の家を見に行った。

例の騒ぎのすぐあとでは、可南子はとてもそんな気になれず、一度は断わろうと考えていた。

「お前の好きにしていいよ」と裕介はいった。

「こういうことは、いったん嫌だと思ったらもう理屈じゃないからな。気持はわかるよ。ただ……」彼は渋い顔になった。「ただね、おれは、あの恩田っていうじいさんみたいな人間を大勢見てきたんだ。病院に勤めていると、医者でなくても、ずいぶん奇妙な人間にでくわすものなんだ。信心が過ぎておかしくなったり、自分を不死身だと思いこんだり、この病気はたたりのせいだから医者にはなおせないと言い張ったりな。内科の外山先生なんか、そういう患者をなおしちゃったおかげで、しばらく悩まされた。今度は先生の方にたたりがいくから、ぜひ一緒に信心しろってしつこいんだそうだ。おれはそういうのを見てきて、世の中には確かに科学で説明のつかないことがあるかもしれないけど、それよりもむしろ、人間が頭の中でこしらえあげることの方がずっと不思議で気味悪いと思うようになったんだ」ここで言葉を切って、今までの話が可南子の頭にしみこむのを待ってからつけ加えた。「あの腕だって、証拠といえる

ものじゃないよ。不幸なことだけど、ああなる原因はいくらでもある。おおかた壊疽かなんかだろうけど」

可南子は考えこんでしまった。その表情を見て、裕介はさらに言葉をたした。「それにあの家は、どう考えたって最高の堀り出しものだよ。お前の望み通りの家じゃないか」

しかも、火曜日になるとあの営業マンから電話がかかってきた。ずいぶんおとなしくなっていて、もっと早くかけたかったのだが、警察で一泊しちゃいましてと弁解した。

「我々はあのじいさんを営業妨害で訴えることにしました」と彼は言った。「実際、あのじいさんのおかげで被った損害はひどいもんですよ。会社もだけど、私個人もね。信用は大なしになるし減棒されるし始末書は書かされるし。あのじじいのおかげで、私は今まで三度もあの家を売りそこなってるんです。後生だから、四度目にならないで下さいよ」

情けない声をきいて、可南子は少し気の毒になった。「でもね、あなただって悪いんですよ。あの家の二階はつぎ足しだって教えてくれなかったでしょう」

「例の迷信ですか？」営業マンはげんなりした声を出した。「あれ、奥さんも信じます？だけどね。そしたらユニット住宅はどうなるんです？あれは全部、できたもののつぎ足しですよ。不吉のかたまりだね」

可南子は思わず笑ってしまった。それに元気づいて、営業マンは名調子に戻った。「四、五年前に新聞に載った話ですけど、ご存じですか？都下のある町で、ある家が『三隣亡』の日に棟上げしたからって、近所の人間がよってたかってぶっ壊そうとしたことがあったんです。不吉だってね。『三隣亡』の日に家を健てると、三軒隣りまでまきこむような災いがおこるっていう迷信があるんですよ。知ってます？」

可南子は知らなかった。「いいえ」

「ま、いいや、ともかくそういう迷信があるんです。もう大騒ぎになりましてね。バトカーもかけつけたりしてね。でも、結極は壊さずに助かって、立派に完成しましたよ。その工事をやったのがうちの取引先の工務店でね。そんなことがあったもんだから今でもときどき様子を見にいってるんだけど、家族全員、ピンピンしてるそうです。その家のおばあちゃんなんか、今年は米寿ですよ。ついこの間は宝くじまで当たったそうです。百万円の」

可南子がへえーっというと相手は笑った。

「ねえ、そんなもんですよ。気にするだけ損だ。足立町のあの家の売り値が安いのは、別にいわくがあるからじゃないんです。口止めされてたんですけども、今の持ち主の本町さんてのはね、両手の指で足らないくらいアパートやビルをもってる金持ちなんだけど、実は脱税がみつかっちゃってね。ものすごい追徴金を払わなきゃならないんですよ。それで、あわててあの家も売り出したんです。現金が要るからね。それにこうなった以上、本町さんとも交渉して、もう少し安くしますよ。迷惑料を引きます。だからどうぞ、一度見に来てやって下さいよ」

土曜日にもなると、可南子はすっかり行く気になっていた。裕介の話と、営業マンの電話と、そのあとに続いた数日間の、「怪物」だの「物の怪」だの「死人」だのの言葉が出てこない健全な暮らし



は、彼女の考えを変えさせるのに充分効果があった。気の毒な恩田というあの男は、ノイローゼなのだ。

当日、同行してくれたのはあの赤黒ネクタイの営業マン（もっとも今日はブルーのをしていたが）だった。彼は、道々、訴訟をおこしたこと、もう少し値引きすることについて上司の決済をとったこと、この契約がまとまれば自分も信用が回復できること、恩田のじいさんはあれからブッツリ姿を見せなくなったことなどを話した。

着いてみると、足立町の家はかけ値なしの堀り出しものだった。アイボリー色の外壁はまだそんなに汚れていないし、青い石綿スレートの屋根もしゃれている。（恩田夫妻は学生の好みを考えたんだわと可南子は思った）外から見たところでは、全体に築後一年ぐらいに見える。中に入ると、それでも一階はやはり古びてくすんでいるし、柱にも傷も目立ったが、この程度のことは何でもない。タイルや壁紙はいくらでも手に入るんだし、造りはしっかりしているのだから問題ない。可南子は浮き浮きと、改装のプランを考えた。

いよいよ二階へあがるというときになっても、この気分はほとんど変わらなかった。ただ、蹴りこみのところにポツポツと散らばっている木目の節が、まるで目のように見えると考えて、それから急いで打ち消した。雨降りではあったが、空は明るかった。階段も明るかった。

階段をあがると、正面があの物入れだった。三つ並んだドアの手前のひとつに、営業マンが先に立って入っていった。裕介もそれに続きかけたが、階段の上に立ってじっと物入れの方をながめている可南子に気づくと、戻ってきた。

二人は並んで廊下の端に立った。

「やっぱり少し気味が悪い」可南子は、いたずらを白状する子供のような口調でいった。

裕介は、ちょっとの間その言葉を計りにかけるようにたたずんでいたが、やがてスッと前へ出て、物入れの方へ進んだ。廊下は大人の男の足ならほんの四、五歩の距離だ。彼はとってに手をかけた。

瞬間、可南子の心臓が動きを止めた。避け難い打撃を受ける直前のように肩が縮まり、まぶたがギュッと閉じた。

裕介は物入れの戸をいっぱいにあけて、ニコニコしながらそこに立っていた。「ほら」と彼はいった。「安心したろ？」

可南子はそちらに近づいていった。

押入れの中は、きれいに塗料が塗られていた。奥の方に少し綿ぼこりがたまっているほかは、何の異常もなかった。

「少しかびくさいわね」可南子は鼻にしわをよせていった。

「無理ないよ。ずっと放ってあったんだからね。金具もさびてる。ひどい音だよ。油をささなきゃな」裕介はいって、戸を動かした。キーキーと高い音がした。最後に彼はギシッという音をたてて戸をしっかり閉めた。可南子は微笑した。ほっとした。

二人は廊下をひき返し、裕介は営業マンのいる部屋へ入っていった。可南子はもう一度廊下の端に立ち、上から階段の下を見おろし、振り返って窓から外をのぞいた。ガラスの向こうでは雨がしとしと降っていた。すぐ隣りは小さなマンションだった。今ふたりが住んでいるところとよく似ていた。でもこれからは違う。わたしたちはこの家に住むんだから。

頭の中でその考えを繰り返してみて、さらに確信がわいてくるのを感じた。そうだ、わたしたちはこの家を買うんだ。さっきちょっと気味が悪いと思ったのはほんの気の迷い。可南子は足がしっかりと地についてくるのを感じた。ストッキングの足に、廊下の板が冷たいのを改めて感じたほどだった。

営業マンの元気な声が聞こえてきた。「ここは唐紙をはずして一つの部屋にした方が使い易いですよ、そう――」

可南子はまた微笑した。そうだ、広い家だもの。そのうちに子供部屋だっているようになるんだし、そしたらその部屋の壁にはかわいい壁紙をはってあげよう――

ふっと、可南子は身震いした。

急に背中が寒くなったのだ。腕を見おろすと鳥はだがたっていた。

（どこか窓が開いてるのかしら）

いえ、どこも開いてない。雨降りだから。だいいち今月の風はとても湿っぽくて蒸し暑いなまぬるい風で――じゃあ――

この冷たい風はどこからくるんだろう？

可南子は当突に振り向いた。彼女が立ちすくむ廊下の反対側の端で、じわじわと、音もなく、物入れの戸が開きつつあった。可南子は目を見張った。

（ちゃんと閉めたはず）

五センチ。

十センチ。

間違いなく物入れから吹き出してくる風には、刺すような異臭が混じりだした。腐った蛋白質の、食器棚の奥の残飯の臭い。そして半分ほど開いた扉の陰で、何かが一閃した。青白い何か。暗い水中でヒラリとした水ヘビの腹。

可南子はあらん限りの声で叫び、電撃を受けたように後ろへ飛び下がった。はずみで身体のバランスを崩し、手すりにつかまろうとしてつかまりそこね、足がすべり、階段の方へ身を投げだした。もしもそのとき階下からのぼってきている人物がいなかったなら、彼女もまた、不運な恩田まつ子と同じ運命をたどっていたかもしれなかった。可南子はその人物にぶつかってもう一度金切り声をあげた。

それは恩田だった。

あの日と同じような服装をして、同じように額に汗を浮かべ、営業マンに殴られたあとがまだほんの少し薄青い。それでいてその目はうつろで、殺気にあふれていた。

「信じて下さらなかった」彼は抑揚のない声でいった。「逃げなさい早く！」

男ふたりも廊下へ飛び出してきた。裕介が恩田を認めて怒声をあげかけた。同時に営業マンの叫び声があがった。

物入れの戸がいっぱいに開いた。突風ほどの勢いで異臭が顔を打った。ひるまなかったのは恩田だけだった。彼は三人をやりすごして物入れに突進した。そのとき鼻をついた新しい異臭と、恩田が右手に下げた赤いポリタンクとは瞬時に結びついた。

「ガソリンだ！」裕介が怒鳴った。火花がきらめいた。可南子は見た。物入れから何かが飛びだすのを。恩田がそれに向かって吠えるように向かっていくのを。

爆発するように炎があがった。火は燃えるというより飛ぶように広がった。またたく間に階段をかけおり、既に恩田がたっぷりガソ



リンをまいておいた一階に燃え広がり、すばしこい動物のように柱をのぼり天井に移って音をたてて燃えあがった。熱気がごうっと吹きあがった。

それからあとのことを、可南子は切れ切れにしか覚えていない。営業マンが窓を開けて何か叫び、目の下で何か白いものが飛びかい、裕介にかかえられて飛びおりるとそれが布団だとわかった。近所の人たちがわらわらと集まってきた。二人は押されたりひっぱられたりしながら家から離れた。

我に帰ったときは、三人並んで道端に立ち、激しく燃えさかる家を見ていた。激しいサイレンの音が続けてして、銀色の水が直線になって飛びかった。水は隣のアパートの壁にぶつかって飛び散り、ガラスに炎が躍った。耐火服が行きかい、女性消防隊員の声がハンドマイクで火災の発生を告げていた。

三人ともひどい格好で、蒼白だった。営業マンのシャツは破れ、腕から血がにじんでいた。可南子は裕介が青ざめるのを初めて見た。結婚前に一度、高速道路で衝突事故に巻きこまれたことがあった。そのときだってこんな顔はしなかったのに。

可南子の足が冷たかった。下を見ると、水の流れの上に立っていたのだ。二人の男のどちらにともなく、「恩田さんは……」ときいた。そして二人の視線の先を追った。そして見た。

何も知らないものには、それは炎と、水と、雨と、煙のいたずらにしか見えなかっただろう。ほんの一瞬のことだった。

炎と煙の吹き出している二階のあの窓から、何かが屋根の上へ飛び出した。それは四つ足のようでもあり、猿にも似ていた。むきだしの手足は青白く、ほかは真黒な髪のようなものでおおわれていた。それには顔がなかった。炎の中で数回身をよじり、祈りをささげる回教徒のような格好をしたかと思うと、それはすぐに炎に包まれた。ひとすじの濃い煙がたち、ほんの一瞬そこに元型を保っていたが、すぐに吹きあがる気流にのまれて、細かな種をまき散らしたように散りじりに空中に吹きとばされ、瞬間的に怖しく長い手の形をとったあと、あとかたもなく消え去った。

全てはまばたきするほどの間のことだった。あとはただ、恩田の望んだ紅蓮の炎が、曇り空を焦がすほどの勢いでごうごうと勝ち誇ったように燃えあがっているだけだった。

焼けあとからは、黒焦げになった恩田の死体が見つかった。幸い、類焼はなかった。

警察と消防署の動きは敏速で、的を得ていた。翌日の朝刊には、「錯乱男、売却した元自宅に放火・焼死」という見出しと、「奥さんを亡くしてからノイローゼ気味だった」という同僚の話が載った。別に続報が出ることもなかった。

赤黒いネクタイの営業マンは名前を牧山といったが、一カ月ほどして名刺の肩書きだけが変わった。不動産業から足を洗ってしまったのだ。可南子と裕介が、遠くて高い建て売り住宅の契約書にハンをついているころには、彼はある金融会社のカウンターに座って、お客に金利の説明をしていた。

可南子と裕介の新しい家は、都心から片道一時間半ほどのところにある新興住宅地「ひまわり台」にあった。足の便は悪いが、緑の多い空気のきれいなところで、同居している可南子の両親も満足し

ている。

たったひとつだけ、両親にとって気がかりなことがあった。それは、壁にカレンダーを下げる釘一本うつにしても、可南子が異様に怯えることで、いったいいつからあんなかつぎやになったのだろうかと、娘に聞こえないところではいつも不思議がっている。